

広葉樹二次林の施業上の取扱いに関する検討会 有識者打合せ

日 時	令和6年1月22日(月)
開催方法	Web会議ツール(Microsoft Teams)を用いたオンライン会議
出席委員	岡野 哲郎(信州大学 学術研究院 森林・環境共生学コース 教授) 酒井 武(国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林総合研究所 森林植生研究領域 チーム長(針広混交林施業担当)) 竹田 慎二(飛騨市役所 農林部 林業振興課長) 横井 秀一(岐阜県立森林文化アカデミー 特任教授) 横山 隆一(公益財団法人 日本自然保護協会 参与) (五十音順、敬称略)
開催内容	とりまとめ(素案)について検討会委員に説明し、意見を伺った。

とりまとめ(素案)に対する意見概要
<p><u>1 本検討会の趣旨及び中部森林管理局管内の広葉樹二次林の現状</u></p> <p><u>(1) 本検討会の趣旨</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・本検討会が、公益的機能の発揮を主たる目的として施業の検討を行うものであることを、趣旨に明記すべきである。 <p><u>(2) 検討対象とする広葉樹二次林の範囲</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・植栽樹種と天然更新した広葉樹が混交している林分を「人工林由来の針広混交林」と表現しているが、「混交林化した植栽地」など林分の生育過程に見合った表現にすべきである。 ・過去に漸伐作業を行い天然更新した林分を「漸伐等実施林分」としているが、漸伐作業は後伐により完結するのが一般的な考え方である。本検討会で検討した林分は、下種伐後に天然更新完了基準を満たすことが認められたものの、後伐が実施されず、母樹とした上層木が点状に残存している状態であり、漸伐作業が完了した状態といえないため、現状を正しく表現すべきである。 <p><u>(3) 管内の広葉樹二次林の現状</u></p> <ul style="list-style-type: none"> ・①「管内の広葉樹二次林の面積等」の本文における「人工林由来の針広混交林」と図1-1～1-3の「針広混交」が混同してしまうので、それぞれを整理した上で、本文と図の整合性をとるよう修正すべきである。 ・各図表について、視覚的に分かりやすい配色、パターン等を使用したほうがよい。 ・表3について、被害のない地域については「0.00」ではなく、「-」で表記すべきである。

2 広葉樹二次林において発揮が期待される多面的機能

(1) 森林において発揮される多面的機能

- ・森林の各機能よりも、本検討会で取り上げる各機能について、広葉樹二次林において何を期待するかということが重要なので、それに特化して記述すべきである。

(2) 国有林野における機能類型区分

- ・(1)の森林において発揮される多面的機能と(2)の国有林野の機能類型区分との関連性を整理して記述すべきである。
- ・機能類型区分における木材等生産機能の位置付けが分かりづらい。「主目的ではないが伐採・利用を行う」ことが分かるような記述とすべきである。

(3) 「管理経営の指針」における広葉樹二次林の施業の考え方

- ・「施業区分ごとの目標とする森林」の表における、天然林複層伐施業群の目標とする森林が、更新を目的として下木を天然更新により導入しようとするものなのか、あるいは、単に階層構造が発達していて公益的機能の発揮に寄与するようなタイプの森林を目指すのかが分かりづらい。目標とする森林、行おうとする施業が分かるような表現となるようにすべきである。

3 広葉樹二次林の類型毎の現地検討

- ・意見なし。

4 類型毎の施業の必要性

- ・現地検討の結果に基づきそれぞれの分類毎に一般化してとりまとめるのは、地域、場所によって条件が異なることから難しい。現地検討結果としてのとりまとめに留めたほうがよいのではないか。
- ・4の類型毎の施業の必要性については、3の広葉樹二次林の類型毎の現地検討の中で、個々の林分の検討結果を総括する形で組み込んだ方がよい。現地検討の結果からは、緊急性を要するような、手を入れなければならない箇所はほとんどなかったという総括でよいと思う。現地検討をした箇所以外については実態が分からないので、5の今後の取組の方向性の中で、可能性も含めて記述したほうが整理しやすいのではないか。
- ・類型をベースにしたとりまとめでなく、多面的機能の中から生物多様性保全、山地災害防止、水源涵養、木材生産等に着目した観点で考えるべきであり、それらの機能をより高度に発揮させることを目的としたときの施業の要否、要する場合どのような施業を行っていくのかを示すことが必要である。
- ・「類型」という表現は、機能類型と混同するので、整理して使い分けるべき。

5 今後の取組の方向性について

- ・人工林由来の針広混交林については、地形や土壌など場所によって混交率や配

置状況が違ってくるので、様々なバリエーションを想定し、どのような森林に誘導していくのかというイメージを記載してほしい。

- ・ 森林施業が生物多様性にどのように影響するのかが、試験研究の中でも重要なテーマになるが、森林官など職員が日常業務の中で、施業の度にデータを取り森林簿等に記録を残していくことが必要。研究機関でなく、署等がデータを積み上げていく旨の記載をすべき。
- ・ データの蓄積は重要であり、本検討会を踏まえて取組をすべき。そのために、類型化を現場でできるように整理することが重要。その整理に基づき現場判断でどのような施業を行っていくのかという仕組みづくりが必要である。
- ・ 本検討会によるとりまとめにより、今後の広葉樹施業において何が変わるのかが不透明である。

－以上－